

絶滅に瀕する

エチゼンダイモンジソウ (福井県坂井郡丸岡町・丈競山)

エチゼンダイモンジソウは、5月下旬から7月に咲く。秋に咲くダイモンジソウによく似た花を付け、葉はカエデに似た切れ込みがある。園芸家に人気があり、原産地では乱獲が横行し、絶滅に瀕している。

明治26年(1893)7月、福井県坂井郡丸岡町の丈競山で最初の発見があった。原産地に近い丸岡町の丸岡小学校校長であった吉永悦郷が採集した。標本を東京でムジナモを発見・発表して、世界的にも名を知られるようになっていた、31歳、新進気鋭の植物学者、牧野富太郎に送った。明治35年(1902)、牧野富太郎はこれを、ダイモンジソウの新変種、カエデダイモンジソウとして発表したのである。

ところが、そのタイプ標本が埋もれてしまっていた事が原因で、専門家の間では、秋に咲き、葉が掌状になるナメライダイモンジソウとして認識されてしまったのである。

その後80年近く経った昭和44年(1969)、福井県の植物愛好家・林幸子が再発見した。この標本を渡辺定

路を通じて、金沢大学の里見信生に送ったのである。東京都立大学教授・若林三千男と現地調査をし、新種である事が確認され、昭和48年(1973)新種・エチゼンダイモンジソウとして発表したのである。

ところが、その後牧野標本館によって、エチゼンダイモンジソウは、牧野富太郎が発表したカエデダイモンジソウと同一ではないかと指摘を受けた。

昭和51年(1976)、若林三千男はエチゼンダイモンジソウは、葉が掌状に深裂する事、横にはう根茎がある事、花が秋ではなく6、7月に咲く事等から、ダイモンジソウの変種ではなく、独立種であるとの見解を示し、学名変更をすることはなく、和名をカエデダイモンジソウとし、別名をエチゼンダイモンジソウとしたのである。

新種発見の記事が、地元のマスコミで大々的に報じられた事もあって、瞬く間に乱獲に遭い、原産地、丈競山ではほぼ絶滅状態である。



66頁と同じ生育地、翌年の2020.5.23撮影。一年で個体数も花茎の数も1/3以下になっていた。この地でも絶滅の日が近い。